

第三回藤堂叶倫朗読教室 合評会

芥川龍之介を想う part II



2024年5月24日(金)

12時30分開場 / 13時開演

中目黒GTプラザホール <裏面地図参照>  
(日比谷線、東急横横線「中目黒」駅前)

入場料金 1,000円 / 要・事前予約

主催:語りと音楽「リリアン」

先着36名様までの事前予約受付のみとなります。  
お申し込みは、各出演者に直接お申し込み下さい。  
当日受付にて受付番号とお名前をお申し出頂き、  
入場料金を頂戴してのご入場となります。

お問い合わせ: 050(3708)4798

協力:恵比寿朗読スタジオ  
<http://toudoukarin.com>

休憩中にお飲み物とお菓子のサービスがございます。

## 〈ご挨拶〉

お客様をお迎えして日頃の勉強成果を発表出来ます事、出演者一同楽しみに致しております。ご来場の皆様そして支えて下さった方々に、ここに心より感謝申し上げます。

本公演は、合評会の為、宜しければご来場のお客様に、各演目ごとに一言ずつご感想をお願いしております。朗読や演出に対する専門的なご批評を求めるものでは無く、お聴き頂いた各作品へのご感想をお願いするものですので、お気軽にご記入頂ければ幸いです。

朗読指導、演出 藤堂叶倫

## 出演者紹介



木村千代 (きむら ちよ)

国際芸術連盟主催第26回「朗読オーディション」合格  
及び奨励賞受賞。第9回「朗読コンクール」第2位。



鈴木裕美 (すずき ひろみ)

フェリス女学院大学卒業。文学座研究所修了。  
NHK教育TV「かきくけ国語」のお姉さん役でデビュー。



朱喜子 (ときこ)

慶應義塾大学法学部卒業。舞台朗読家として活動。  
作品の心をすくい取る演者として定評がある。



小林己恵子 (こばやし みえこ)

日本女子大学卒業。文学座研究所修了。国際芸術連盟  
主催第30回「朗読オーディション」合格。

## 講師紹介

藤堂叶倫 (とうどう かりん) <http://toudoukarin.com>

東京都出身。日本大学芸術学部卒業。朗読を声優 鈴木弘子氏に師事。現在、語りを演出家 笠井賢一氏に師事。  
令和3年度(第76回)文化庁芸術祭参加公演にて森鷗外作「高瀬舟」、浅田次郎作「うらぼんえ」を朗読。

藤堂叶倫朗読教室・恵比寿朗読スタジオ代表 / 国際芸術連盟主催朗読オーディション及びコンクール審査員。  
京急百貨店カルチャーCOTONOWA「朗読基礎講座」「朗読応用講座」講師

## 〈中目黒GTプラザホール〉

〒153-0051 東京都目黒区上目黒2-1-3  
TEL : 03-6412-5377

東急東横線、東京メトロ日比谷線の中目黒駅南口改札を出て、東口2より数メートル歩くと中目黒GTに到着します。地下1階へ降りるとGT広場となります。GT広場に面してホールの入口があります。

※ホール専用の駐車場がありません。  
中目黒GT内地下の民間有料駐車場をご利用ください。



# 芥川龍之介 1892年(明治25年)～1927年(昭和2年)

いも がゆ

## 芋粥

1916年(大正5年)

木村 千代

(あらすじ)

平安時代、摂政に勤める五位が主人公である。風采の上がらない五位は周りの人々からさげすまれ、虐められていた。そして自分でもその待遇を受け入れるほど、いくじのない男であった。彼は「芋粥を飽きるほど飲みたい」という願望を持っていた。ある日、五位は藤原利仁に突然誘われて京都から敦賀まで旅をすることになってしまう。そこで、利仁の計画により大量の芋粥を眼の前にして、すっかり食欲をなくしてしまった。

(作品への想い)

たまに好きなものを少し食べるから、なおさら美味しく感じる。いつもどつきあればそれも好物でなくなってしまう。適量以上に何かを求めるることは、決して幸せなこととは言えないと教えてくれる作品だと感じています。

元慶(がんぎょう) 877年～885年 / 仁和(にんな)885年～889年 / 五位(ごい)律令制の位階の第五番目。  
平安時代清涼殿の殿上にのぼることを許された資格の最下位。 / 侍所(さむらいどころ)親王、公家家などにある事務や警備の為の侍の詰め所。 / 巳時(みのとき)午前10時頃 / 戌時(いぬのとき)午後8時頃 / 卯時(うのとき)午前6時頃 / 郡(しとみ)平安時代から住宅などに使われた格子と取り付けた板戸 / 提(ひきげ)銀やすず製などのつると注ぎ口のある小鍋形の銚子 / 土器(かわらけ)素焼きの陶器

木村千代 記

と し しゅん

## 杜子春

1920年(大正9年)

鈴木 裕美

(あらすじ)

放蕩の末無一物になった杜子春は、落魄して唐の都洛陽の西の門の下に佇んでいた。そこに不思議な老人が現れ杜子春を洛陽一のお金持ちにしてくれる。しかし何の考えもなく遊興を続け二度までも同じ事を繰り返し無一文となる。三度目に老人に会った時、杜子春は老人を仙人と見抜きお金より仙人になる望みを話し弟子入りを懇願する。鉄冠子という仙人は、願いを聞き入れ杜子春を峨眉山の奥に連れて行き試練を与える 何が起きても決して声を出すなよと言い残し…

(作品への想い)

杜子春は中国の伝記(杜子春伝)を踏まえ芥川が子供の為に書いた作品であり「赤い鳥」に発表されました。生きる上で何が大切なか自分の物差しを持って、自分の人生を愛し生きていますか?と私達に問いかけてくれる作品であると感じています。

西王母(せいおうぼ)仙人に免許を与える仙女 / 閻穴道(あんけつどう)罪人を流す時、極悪人を通すという暗黒な道 / 森羅殿(しんらでん)宇宙間の一切の物が集まる御殿

鈴木裕美 記

〈休憩〉 約15分

お飲み物とお菓子でごゆっくりとおくつろぎください

〈おことわり〉

今回取り上げる作品には、一部の表現(語句)が現代の人権感覚に照らして差別的ととられる箇所が含まれております。しかしながら、作者が差別の助長を意図した訳では無い事、また執筆当時の時代背景、高い文学性を考慮して、該当箇所の削除や書き換えは行わず、原文のまま朗読致します。何卒ご理解の程、お願い申し上げます。

かみがみ の び しょ

# 神々の微笑

1922年(大正11年)

朱喜子

あらすじ

16世紀、宣教師パードレ・オルガンティノは、日本全体に不思議な力(靈)が潜んでいると感じ、布教の難しさに悩み憂鬱な日々を過ごしていた。日本の靈との戦いを不安に思う彼は、デウス(キリスト教の全能の神)に加護を求め祈っていると、天岩戸開きの幻を見て衝撃のあまり、気を失う。意識を回復したオルガンティノは「この国の靈と戦うには思ったよりも困難らしい」とつぶやく。すると「負けですよ」という声を聞く。翌日、数人の武士が入信し、気を取り直していたオルガンティノに、古い靈である老人が再び現れ「天主教はいくら広まっても最後には負けてしまう、『我々の力は破壊する力ではなく、造り変える力である』デウスさえもこの国の人間に変わってしまうかも知れない……」と話す。

作品への想い

この作品は芥川の日本人論ともいわれています。発表されてから一世紀近くが過ぎ、敗戦後の日本は、経済発展はしたもの、日本人の精神性は薄れていった。芥川は、現代の人々に、神話時代からの“造り変える力”的歴史を再認識させ、日本人としての誇りを取戻すよう示唆していると感じています。

\*\*\*\*\*  
パードレ・オルガンティノ(1530年～1609年)イタリア人宣教師。1570年に日本に来日、京都に教会(南蛮寺)を設立。長崎で死去。/ 大日靈貴(おおひるめむち)天照大神の別称 / 本地垂迹(ほんじすいじやく)神道の八百万の神々は、異国の様々な仏の権現(仮の姿)である。日本の実情に合わせ姿を変えて現れた(垂迹)という考え方。

朱喜子 記

ひな  
**雛**

1928年(大正12年)

小林 己恵子

あらすじ

これはある老女の話である。から始まる、お鶴という老女が15才の頃を回顧する物語りです。時代は明治。紀の国屋の娘だったが明治維新の嵐の中、用立てたご用金の回収もままならず、又たびたびの火災のおかげで家計は火の車となり、やむを得ず土蔵の中の桐箱にしまってあった雛人形を横浜のアメリカ人に売らなくてはならなくなつた。娘はそのことをあまり悲しいとは思わなかつたものの、手離す日が迫つてくると、今一度だけ見ておきたいという衝動に駆られ、父に懇願するも、見れば未練が残ると考えたのか、桐箱から出すことも許さない。開花人の兄も、頑固に反対する。しかし明日、雛を手離すという前の晩、夜中に目を覚ますとそこには父の姿が…父の前には雛が並べ立ててあるのでした。

作品への想い

行燈の光に照らし出された雛人形の美しさとそれを見届ける父と娘の姿には切なさを感じました。芥川は、「雛」という作品の中で明治維新の後、紀の国屋の娘でさえも雛を手離さなくてはならなかつた社会情勢を何らかの形で残そうとしたのではないかと思いました。それと同時に時代の大きな変化の中で、生きづらさを抱えていた家族の中に芥川自身を投影していたような気も致します。

\*\*\*\*\*  
柴竹(しばく)雅号 遊び人 趣味人／大通(だいつう)遊興の道によく通じていること／徳川家の後瓦解(とくせんけのごがかい)慶應三年大政奉還のため徳川幕府が崩壊したこと。

小林己恵子 記

〈終演は15時50分を予定しております〉